

■吉田久 裁判官。大審院の裁判長として、翼賛選挙に唯一の無効判決を下し、追放されるも敗戦へ。

よしだひさし

秩父事件・・・1884＝ 福井市佐佳枝上町で、代々農家で八百屋をしていた吉田久蔵の長男に生まれる。

国民之友始・1887＝ 3歳：父が店を閉め、一家で上京、麹町で人力車業を始める。
幼時より神童ぶりを謳われ、家業が順調になって家計も安定、弟妹を合わせた6人家族となり、

帝国憲法發布1889＝ 5歳：
帝国議会始・1890＝ 6歳：富士見町の私立宮崎小学校に入学、番町高等学校尋常科に移った後も、常に首席を続けるが、

馬車や鉄道の普及で、家業が次第にふるわなくなり、

郡司千島探検1893＝ 9歳：
日清戦争始・1894＝10歳：父が陸軍病院の軍属として単身中国に渡ったため、残された家族は困窮、学費を払えなくなって、中退、

白馬会・・・1896＝12歳：父が無事帰国すると、東京での暮らしをあきらめて福井に戻り、

福井駅前で駄菓子を扱う休憩所を開いた父が、屋台も引いて働くなか、昼間は福井地方裁判所検事局の小僧になって家計を助けながら、夜間学校に通ううち、司法官になって一家を養いたいと思うようになり、父母の反対を押し切って、

教科書疑獄・1902＝18歳：再び上京し、大審院の小僧になって収入を得ながら、和仏法律学校(法政大学の前身)の夜間部に通うが、昼間の学校に通いたいと、伝手を求めて法律事務所の事務員となり、所長の弁護士の快諾を得て、東京法学院(中央大学の前身)に転学。日本橋の事務所から神田錦町の学校まで約4キロの道のりを、彼は羽織・袴姿に下駄履きで毎日歩いて通い、教場では講義を熱心に聴講し、1年の時から抜群の成績を修め、2年時には特待生として学費を免除され、さらに3年の時には貸費生となり、その甲斐あって、

日露戦争終・1905＝21歳：卒業年時に、弱冠21歳で判事検事登用試験に2番で合格、司法官試補となり、法曹の道を歩み始め、検事となるが、私学出身ということで、水戸地方裁判所を皮切りに、東京、岡山、広島、浜松の地方回り、すぐに自分が検事に向かないと悟り、岡山時代には、ドイツ語の原書が読めなければ裁判官は務まらないだろうと、六高の教授に依頼して、1年半も授業を受けるなどし、上司に申し入れたのが功を奏して、

韓国併合・・・1910＝26歳：ようやく東京区裁判所の判事となり、*念願の裁判官として出発する。同時に結婚し、自宅も購入。多くの魅力的な先輩の教えを受け、とくに、高潔な人柄を法曹界で広く知られ、生涯現場主義を貫いた前田直之助から強く影響されながら、仕事に励むかわら、フランス語の原書も読みたいと授業を受けるなど、相変わらず勉強熱心で、

大逆事件判決1911＝27歳：
明治天皇没・1912＝28歳：
第一次大戦始1914＝30歳：シーメンス事件を担当。
千葉地裁の部長判事を経て、
東京控訴院判事となり、

ペルシヤ条約・1919＝35歳：
大暴落・・・1920＝36歳：
原敬首相暗殺1921＝37歳：この間、3男1女を授かって、生活も順調であったが、

護憲三派圧勝1924＝40歳：私学出身者として破格の部長に任ぜられ、
治安維持法・1925＝41歳：三男がまだ乳飲み子の時に妻が急死、以後、女中を雇い自分でも家事をこなして生活。*かつてそこで小僧をしていた人物としては空前絶後の大審院判事となって、

判事のまま、中央大学の講師を引き受け、

世界恐慌・・・1929＝45歳：

満州事変・・・1931＝47歳：この間、学校経営者の娘と再婚、

日中戦争始・1937＝53歳：
健保+総動員 1938＝54歳：

日米開戦・・・1941＝57歳：大審院判事部長に栄進。大審院第三民事部の部長判事(裁判長)として、
・・・1942＝58歳：*戦時下実施された唯一の衆議院選挙"翼賛選挙"をめぐる選挙無効訴訟の一つ鹿児島2区選挙無効訴訟事件

創価学会検挙1943＝59歳：を指揮、審理に際して、4人の陪席裁判官と共に、現地の反発や米軍の空襲など、死を覚悟して鹿児島へ出張、職権で知事を喚問したのをはじめ、187人もの証人尋問行い、大審院内部でも"壮挙"と評されたが、
「日本民法論」刊行。大審院長自身が{法律新報}に「戦争と法律」を寄稿して圧力をかけて来た上、喚問した知事は直後に警視総監となり、特高の尾行がついたばかりか、自宅まで憲兵に包囲され、さらに、大審院で同時進行していたいくつかの選挙区の無効訴訟について原告敗訴の判決が出され、

年金+総武装 1944＝60歳："全国司法長官会同"の臨時会同が開催され、首相_東条英機がまさに脅しといえるような演説をぶつなか、
敗戦・・・1945＝61歳：*「鹿児島2区の選挙は無効」と、翼賛選挙で唯一の無効判決を下す。議会政治を維持しようとする人たちから賞賛され、戦争末期にもかかわらず同選挙区では選挙がやり直されることになるが、判決宣告直後、迫られるように退職、同時に大空襲で大審院も焼失。その後も、"危険人物"として特高警察の監視下に置かれたまま、中央大学の講師を続け、郷里福井の空襲で最愛の長女を失ってまもなく、敗戦を迎える。失意のなか、鳩山一郎から誘われて日本自由党に加入、同党の憲法改正要綱中の司法権に関する規定を起草。

新憲法公布・1946＝62歳：貴族院議員に勅撰され、参議院議員選挙法の立案などに携わる。鳩山一はが公職追放となってしまう。
新憲法施行・1947＝63歳：貴族院の廃止により退任。_中央大学に復帰し、教授として迎えられる。

独立回復・・・1951＝67歳：
国連加盟・・・1956＝72歳：

戦後、中退だったにもかかわらず、番町小学校から、行事のたびに来賓の案内が来ると、かかさず、背広を着て出かけたという。この間、「日本民法論」が再版、再々版される。

安保闘争・・・1960＝76歳：大学院の研究科長をしている時、_安保闘争となり、それに学生が参加することについては批判的な意見を持っていたが、指導していた院生が読んでいた{アサヒグラフ}に座り込みをする学生を殴打する警官隊の写真が掲載されているのを見るや、法学部に貸切りバスを呼んで'学生も教員もこれに乗って国会に行け'と言ったという。

大学紛争始・1965＝81歳：中央大学を退職、千葉商科大学に教授として招かれたが、
美濃部都知事1967＝83歳：高齢のため、足を怪我したのを契機に、_ようやく隠居、まもなく胃潰瘍で入院し、体調も悪化、
トノシヨク・・・1971＝87歳：老衰により日本大学附属病院で、_没した。